

日蓮大聖人御書全集

ししょうみつぼうごしよ

聖密房御書

新版
1198
〜
1203

聖密房御書

ぶんえいこうき しょうみつぼう

文永後期 聖密房

だいにちきよう

ぜんむい

ふくう

こんごうちとう

ぎ

い

大日経をば、善無畏・不空・金剛智等の義に云わく

だいにちきよう

り

ほけきよう

り

おな

いん

「大日経の理と法華経の理とは同じことなり。ただし印と

しんごん

ほけきよう

おと

た

りようしよかしよう

こうしゆ

真言とが法華経は劣るなり」と立てたり。良諤和尚・広修・

ゆいけん

もう

ひと

だいにちきよう

けごんぎよう

ほけきよう

ねはんぎようとう

維罽なんど申す人は「大日経は華嚴経・法華経・涅槃経等

およ

ほうどうぶ

きよう

にほん

こうぼうだいしい

には及ばず。ただ方等部の経なるべし」。日本の弘法大師云

ほけきよう

けごんぎようとう

おと

だいにちきよう

わく「法華経はなお華嚴経等に劣れり。まして大日経には

およ

とううんぬん

い

ほけきよう

しやか

せつ

及ぶべからず」等云々。また云わく「法華経は釈迦の説、

だいにちきよう だいにちによらい せつ きようしゆすで 異

しやかによらい

大日経は大日如来の説、教主既にことなり。また釈迦如来

だいにちによらい おんつか

けんきよう 説 たも

みつきよう

は大日如来の御使いとして顕教をとき給う。これは密教

しよもん

ほけきよう

かんじん

の初門なるべし」。あるいは云わく「法華経の肝心たる

じゆりようほん

ほとけ

けんきよう

なか

ほとけ

みつきよう

寿量品の仏は、顕教の中にしては仏なれども、密教に

たい

ぐぼく

ぼんぷ

うんぬん

対すれば具縛の凡夫なり」と云々。

にちれんかんが

い

だいにちきよう

しんやく

きよう

とう

げんそうこうてい

日蓮勘えて云わく、大日経は新訳の経、唐の玄宗皇帝

おんとき

かいげんしねん

てんじく

ぜんむいさんぞう持

きた

ほけきよう

の御時、開元四年に天竺の善無畏三蔵もて来る。法華経は

くやく

きよう

こうしん

ぎよう

らじゆうさんぞう

きた

ちゆうかん

旧訳の経、後秦の御宇に羅什三蔵もて来る。その中間

さんびやくよねん

ほけきようわた

のち

ひやくよねん

へ

てんだいちしや

三百余年なり。法華経亘つて後、百余年を経て、天台智者

だいし きょうもん ごじしきょう た かみごひやくよねん がくしゃ

大師、教門には五時四教を立てて、上五百余年の学者の

きょうそう かんもん いちねんさんぜん ほうもん はじ

教相をやぶり、觀門には一念三千の法門をさとりて、始め

ほけきょう り え

て法華經の理を得たり。

てんだいだいし いぜん さんろんしゅう いご ほつそうしゅう はっかい た

天台大師已前の三論宗、已後の法相宗には、八界を立て

じっかい ろん いちねんさんぜん ほうもん た 様

て十界を論ぜず。一念三千の法門をば立つべきようなし。

けごんしゅう てんだい いぜん なんぼく しよし けごんぎょう ほけきょう すぐ

華嚴宗は、天台已前には南北の諸師「華嚴經は法華經に勝

もう けごんしゅう な そうちら とう よ

れたり」とは申しけれども、華嚴宗の名は候わず。唐の代

こうそう きさきま そくてんこうこう もう ひと おんとき ほうぞうほっし ちようかん

に高宗の後・則天皇后と申す人の御時、法蔵法師・澄觀な

もう ひと けごんしゅう な た しゅう きょうそう ごきょう

んど申す人、華嚴宗の名を立てたり。この宗は教相に五教

た かんもん じゅうげん ろくそう もう ほうもん 夥

を立て、觀門には十玄・六相なんど申す法門なり。おびただ

見 ちようかん てんだい 破

しきようにみえたりしかども、澄觀は天台をはするよう

てんだい いちねんさんぜん ほうもん 借 取 きよう

て、なお天台の一念三千の法門をかりとりて、我が経の

こころ たく えし もん こころ

「心は工みなる画師のごとし」の文の心とす。これは、

けごんしゆう てんだい お いちねんさんぜん

華嚴宗は天台に落ちたりというべきか、また一念三千の

ほうもん ぬす 取 ちようかん じかい ひと だいしよう

法門を盗みとりたりというべきか。澄觀は持戒の人、大小

かい いちじん 破 いちねんさんぜん ほうもん 盜

の戒を一塵をもやぶらざれども、一念三千の法門をばぬす

取 くでん

みとれり。よくよく口伝あるべし。

しんごんしゆう な てんじく おお ふしん

真言宗の名は天竺にありやいなや。大いなる不審なるべ

しんごんきよう

ぜんむいとう

しゅう

な

かんど

し。ただ真言経にてありけるを、善無畏等の宗の名を漢土

っ

知

にして付けたりけるか。よくよくしるべし。なかんずく、

ぜんむいとう

ほけきよう

だいにちきよう

しやうれつ

判

りどう

善無畏等、法華経と大日経との勝劣をはんずるに、「理同

じしよう

しゃく

造

いちねんさんぜん

り

ほけきよう

だいにちきよう

事勝」の釈をばつくりて、「一念三千の理は法華経・大日経

おな

言

いん

しんごん

ほけきよう

な

これ同じ」なんどいえども、「印と真言とが法華経には無け

じほう

だいにちきよう

おと

じそう 欠

じりぐみつ

れば、事法は大日経に劣れり。事相かけぬれば、事理俱密

ぞん

いま

にほんこく

しよしゆう

がくしゃとう

もなし」と存ぜり。今、日本国および諸宗の学者等、なら

殊

もち

てんだいしゆう

とも

ぎ

許

びにことに用いるべからざる天台宗、共にこの義をゆるせ

れい

しよしゆう

ひとびと

嫉

いちどう

みだ

な

り。例せば、諸宗の人々をばそねめども、一同に弥陀の名

称

じしゆう

ほんぞん

捨

てんだいしゆう

ひとびと

をとなえて自宗の本尊をすてたるがごとし。

天台宗の人々

いちどう

しんこんしゆう

お

もの

は一同に真言宗に落ちたる者なり。

にちれん

り 行

ふしん

い

ぜんむいさんぞう

日蓮、理のゆくところを不審して云わく、善無畏三蔵の

ほけきよう

だいにちきよう

り おな

じ すぐ

た

法華経と大日経とを「理は同じく事は勝れたり」と立つる

てんだいだいし

はじ

た たま

いちねんさんぜん

り

いま

は、天台大師の始めて立て給える一念三千の理を、今、

だいにちきよう

取

い

おな

じゆう

はん

じよう

許

大日経にとり入れて同じと自由に判ずる条、ゆるさるべ

れい

さき

ひとまろ

明

石

浦

しや。例せば、先に人丸が「ほのぼのとあかしのうらの

朝 霧

島

隠

船

思

詠

あさぎりにしまがくれゆくふねをしぞおもう」とよめるを、

き

淑

望

みなもと

順

はん

い

紀のしくぼう、源のしたごうなどが判じて云わく「こ

うた

ちち

はは

とううんぬん

いま

ひと

われ

詠

の歌はうたの父、うたの母」等云々。今の人、「我うたよめ

もう

ないしふね

思

いちじ

り」と申して、「ほのぼのと乃至船をしぞおもう」と一字を

違

わ

さい

ひとまろ

もう

もたがえずよみて、「我が才は人丸におとらず」と申すをば、

ひと

もち

山 人

あま

もち

人これを用いるべしや。やまがつ・海人などは用いるこ

てんだいだいし

はじ

た

たま

いちねんさんぜん

ともありなん。天台大師の始めて立て給える一念三千の

ほうもん

ほとけ

ちち

ほとけ

はは

ひやくよねんいご

ぜんむい

法門は、仏の父、仏の母なるべし。百余年已後の善無畏

さんぞう

ほうもん

盗

取

だいにちきよう

ほけきよう

り

三蔵がこの法門をぬすみとりて、「大日経と法華経とは、理

どう

りどう

もう

いちねんさんぜん

書

同なるべし。理同と申すは、一念三千なり」とかけるをば、

ちえ

ひと

もち

智慧かしこき人は用いるべしや。

じしよう もう いん しんごん もう てんじく

「事勝と申すは、印・真言なし」なんと申すは、天竺の

だいにちきよう ほけきよう しょうれつ かんど ほけきよう だいにちきよう しょうれつ

大日経・法華経の勝劣か、漢土の法華経・大日経の勝劣

ふくうさんぞう ほけきよう ぎき ほけきよう いん しんごん 添

か。不空三蔵の法華経の儀軌には、法華経に印・真言をそえ

やく にんのうきよう らじゆう やく いん しんごん ふくう

て訳せり。仁王経にも羅什の訳には印・真言なし。不空の

やく にんのうきよう いん しんごん てんじく きようぎよう

訳の仁王経には印・真言これあり。これらの天竺の経々

むりよう じ がっし かんど くに 隔 遠

には無量の事あれども、月氏・漢土、国をへだててとおく、

持 き 難 きよう りやく

ことごとくもちて来がたければ、経を略するなるべし。

ほけきよう いん しんごん にじようさぶつ ころくくみようじう

法華経には、印・真言なけれども、二乗作仏・劫国名号・

くおんじつじよう もう 規模 じ だいにちきようとう いん しんごん

久遠実成と申すきぼの事あり。大日経等には、印・真言は

にじようさぶつ くおんじつじよう

にじようさぶつ いん

あれども、二乗作仏・久遠実成これなし。二乗作仏と印・

しんごん

なら

てんち

しようれつ

しじゆうよねん

きようぎよう

真言とを並ぶるに、天地の勝劣なり。四十余年の経々に

にじよう

はいしゆ

ひと

いちじにじ

むりようむへん

きようぎよう

は「二乗は敗種の人」と一字二字ならず無量無辺の経々に

きら

ほけきよう

は

にじようさぶつ

の

嫌われ、法華経にはこれを破して二乗作仏を宣べたり。い

きようぎよう

いん

しんごん

きり

にじようさぶつ

の

ことば

ずれの経々にか印・真言を嫌うことばあるや。その言な

だいにちきよう

な

きり

いん

しんごん

ければ、また大日経にもその名を嫌わず、ただ印・真言を

説

とけり。

いん

もう

て

ゆう

て

ほとけ

印と申すは手の用なり。手、仏にならずば、手の印、仏

成

しんごん

もう

くち

ゆう

くち

ほとけ

になるべしや。真言と申すは口の用なり。口、仏にならず

くち しんごん ほとけ

にじよう さんごう ほけきよう あ

ば、口の真言、 仏になるべしや。二乗の三業は法華経に値

むりようごう せんにひやくよそん いん しんごん ぎよう

いたてまつらずば、無量劫、 千二百余尊の印・真言を行ず

ほとけ すぐ にじようさぶつ じほう 説

とも、 仏になるべからず。 勝れたる二乗作仏の事法をばと

もう おと いん しんごん じほう すぐ

かずと申して、 劣れる印・真言をとける事法をば勝れたり

もう り ぬすびと おと すぐ

と申すは、理によれば盗人なり、事によれば「劣れるを勝る

おも けん げどう とが えんま せ 被

と謂う見」の外道なり。この失によりて閻魔の責めをばかぼ

ひと のち 悔 てんだいだいし あお ほっけ

りし人なり。後にくいかえして、天台大師を仰いで法華に

あくごう のが

うつりて、 悪道をば脱れしなり。

くおんじつじよう だいにちきよう 思

久遠実成ななどは、 大日経にはおもいもよらず。 久遠

くおん

じつじよう いっさい ほとけほんじ たと たいかい くおんじつじよう ぎよちよう

実成は一切の仏の本地。譬えば、大海は久遠実成、魚鳥

せん に ひやく よそん くおん じつじよう せん に ひやく よそん

は千二百余尊なり。久遠実成なくば、千二百余尊は

浮 草 ね よる つゆ にちりん い

うきくさの根なきがごとし。夜の露の日輪の出でざるほど

てんだいしゆう ひとびと わきま

なるべし。天台宗の人々、このことを弁えずして、真言師

誑 しんごんし じしゆう あやま

にたぼらかされたり。真言師はまた自宗の誤りをしらず、

あくどう じゃねん 積 置

いたずらに悪道の邪念をつみおく。

くうかいわじよう り わきま うえ けごんしゆう

空海和尚は、この理を弁えざる上、華嚴宗のすでにやぶ

じゃぎ か 取 ほけきよう けごんぎよう

られし邪義を借りとりて、「法華経はなお華嚴経におとれり」

びやつけん きもう ちようたん とかく うむ かめ こう

と僻見せり。亀毛の長短、兎角の有無。亀の甲には毛な

破

ちようたん 争

うさぎ かしら つの

し、なんぞ長短をあらそい、兎の頭には角なし、なんの

うむ ろん りどう もう ひと えんま 責 のが

有無を論ぜん。「理同」と申す人、いまだ閻魔のせめを脱れ

だいにちきよう おと けこんぎよう おと もう ひと ほうぼう

ず。「大日経に劣る、華嚴経になお劣る」と申す人、謗法を

のが ひと 替 ほうぼう ぎ おな

脱るべしや。人はかわれども、その謗法の義、同じかるべ

こうぼう だいいち みでし 柿 本 紀 そうじよう こんじようき

し。弘法の第一の御弟子・かきのもときの僧正、紺青鬼と

知 ふうかいがいげ あくどううたが

なりし、これをもつてしるべし。空海改悔なくば悪道疑う

覚 なが ひとびと

べしともおぼえず。その流れをうけたる人々、またいかん。

と い 和 ほつし いちにん あくごん 吐

問うて云わく、お法師一人この悪言をはく、いかん。

こた い にちれん ひとびと なん

答えて云わく、日蓮はこの人々を難ずるにはあらず、た

ふしん

怒思

だ不審するばかりなり。いかりおぼせば、さておわしませ。

げどう ほうもん

いつせんねん

はっぴやくねん

ごてん

りんおう

外道の法門は、一千年・八百年、五天にはびこりて、輪王

ばんみん

頭

傾

くじゅうごしゆとも

ほとけ

より万民こうべをかたぶけたりしかども、九十五種共に仏

破

しょうろんじ

じゃぎ

ひやくよねん

破

にやぶられたりき。撰論師が邪義、百余年なりしもやぶれ

なんぼく

さんびやくよねん

じゃけん

にほんにひやくろくじゅうよねん

き。南北の三百余年の邪見もやぶれき。日本二百六十余年の

ろくしゅう

ぎ

うえ

でんぎようだいし

六宗の義もやぶれき。その上、このことは、伝教大師の

しよ

なか

そうろう

もう

ある書の中にやぶられて候を申すなり。

にほんこく

だいじよう

ごしゅう

ほつそう

さんろん

けごん

しんごん

てんだい

日本国は大乗に五宗あり。法相・三論・華嚴・真言・天台

しょうじよう

さんしゅう

くしゃ

じようじつ

りつしゅう

しんごん

なり。小乗に三宗あり。俱舎・成実・律宗なり。真言・

けごん さんろん ほつそう だいじよう

出

華嚴・三論・法相は大乗よりいでたりといえども、くわし

ろん みなしようじよう

しゆう もう かい じよう え さんかく

く論ずれば皆小乗なり。宗と申すは、戒・定・慧の三学

そな なか じよう え

かい

を備えたるものなり。その中に定・慧はさておきぬ、戒を

だいしよう 勝 示 打 分

とうじ しんごん

もつて大小のほうじをうちわかつものなり。東寺の真言・

ほつそう さんろん けごんとう かいだん とうだいじ い

法相・三論・華嚴等は、戒壇なきゆえに東大寺に入つて

しようじようりつしゆう ろにゆう しゆうふん かい たも かい ろん

小乗律宗の驢乳・臭糞の戒を持つ。戒をもつて論ぜば、

しゆう しようじよう しゆう

これらの宗は小乗の宗なるべし。

ひえいざん てんだいしゆう しんごんしゆう にしゆう でんぎようだいしなら

比叡山には、天台宗・真言宗の二宗、伝教大師習いつ

たま てんだいえんどん えんじよう えんえ えんかい かいだん

たえ給いたりしかども、天台円頓の円定・円慧・円戒の戒壇

た 由 もう たま てんだいしゅう たい

立つべきよし申させ給いしゆえに、「天台宗に対しては

しんごんしゅう な 思 てんだいほけしゅう し

真言宗の名あるべからず」とおぼして、天台法華宗の止

かん しんごん たま でんぎよう

観・真言とあそばして、公家へまいらせ給いき。伝教より

じかく たま せいまい もん てんだいほけしゅう しかん

慈覚たまわらせ給いし誓戒の文には、天台法華宗の止観・

しんごん まさ 載 しんごんしゅう な 削

真言と正しくのせられて、真言宗の名をけずられたり。

てんだいほけしゅう ぶつりゅうしゅう もう ほとけ た そうろう

天台法華宗は仏立宗と申して、仏より立てられて候。

しんごんしゅう しんごん とうぶん しゅう ろんじ にんしはじ しゅう な

真言宗の真言は当分の宗、論師・人師始めて宗の名をた

てたり。しかるを、事を大日如来・弥勒菩薩等によせたる

ほとけごぞんち みこころ ほけきよういつしゅう

なり。仏御存知の御意は、ただ法華経一宗なるべし。

ほとけごぞんち みこころ ほけきよういつしゅう

しようじよう

にしゆう

じゆうはつしゆう

にじゆつしゆうそう

しよせん

小乗には二宗・十八宗・二十宗候えども、ただ所詮

り

むじよう

いちり

ほつそうしゆう

ゆいしんうきよう

だいじようしゆう

むりよう

の理は無常の一理なり。法相宗は唯心有境。大乘宗、無量

しゆう

しよせん

ゆいしんうきよう

いつしゆう

の宗ありとも、所詮は唯心有境とだにいわば、ただ一宗な

さんろんしゆう

ゆいしんむきよう

むりよう

しゆう

しよせん

ゆいしんむきよう

り。三論宗は唯心無境。無量の宗ありとも、所詮、唯心無境

いつしゆう

だいじよう

くうう

いちぶん

ならば、ただ一宗なり。これは大乘の空有の一分か。

けごんしゆう

しんごんしゆう

上

たんちゆう

下

だいじよう

くうう

華嚴宗・真言宗、あがらば但中、くだらば大乘の空有な

きようもん

せつそう

けごん

はんにか

およ

るべし。經文の説相は、なお華嚴・般若にも及ばず。ただ

ひと

思

ひとびと

おお

しん

げによ

おう

し、よき人とおぼしき人々の多く信じたるあいだ、下女を王

愛

似

だいにちきようとう

げによ

り

たんちゆう

のあいするにいたり。大日経等は下女のごとし。理は但中

ろんじ にんし おう ひと 愛
にすぎず。論師・人師は王のごとし。人のあいするによつ

威望

ていぼうがあるなるべし。

かみ もんどうとう とうじ よ 末

上の問答等は、当時は世すえになりて、人の智浅く慢心高

ひと ちあさ まんしんたか

もち

きゆえに、用いることはなくとも、聖人・賢人なんども出

しょうにん けんじん

とき

しさい

でたらん時は、子細もやあらんずらん。不便におもいま

ふびん 思

めやす しる

おん 隙

習

たも

らすれば、目安に注せり。御ひまにはならわせ給うべし。

だいじ

ほうもん

虚 空

蔵 ぼさつ

これは大事の法門なり。こくうぞう菩薩にまいりて、つ

読

たてまつ

たも

ねによみ奉らせ給うべし。

にちれん

かおう

日蓮

花押

しょうみつぼう
聖密房にこれを遣わす。
つか